



Data

監督・脚本：黒崎博
出演：柳楽優弥／有村架純／三浦春馬／伊ッセー尾形／山本晋也／三浦誠己／宇野祥平／尾上寛之／渡辺大知／葉山奨之／奥野瑛太／土居志央梨／國村隼／田中裕子
声の出演：ピーター・ストーメア

👁️👁️ みどころ

戦局厳しき中、京都帝国大学の荒勝研究室では原子爆弾の研究を！そんな事実を心強いと受け止める？それとも・・・？私はそんなテーマが大好き。したがって、今年の終戦記念日に向けた映画はこれで決まり！そう思ったが、こりゃ所詮 TV ドラマの延長！？

研究レベルが低かったのは仕方ないが、本作で描かれる若き科学者たちの青春模様は一体何？荒勝文策教授のセリフはカッコいいが、その実態は？

原爆投下直後の広島調査の映像もナンセンスだが、最悪は、クライマックスに設定された比叡山登り。こりゃ一体ナニ？この登山の決行は一体いつ？

断片的に残っている荒勝文策証言をここまで膨らませた黒崎博監督の脚本と演出は如何なもの？8月6日と8月9日、そして8月15日の整合性を一体どう考えているの？



■□■日本でも原爆研究が！あの時代、京大の荒勝研究室は？■□■

1941年12月7日の真珠湾攻撃を契機として太平洋戦争が始まったが、アメリカの原子爆弾製造計画たる「マンハッタン計画」が始まったのは、翌1942年8月だ。原子爆弾開発の可能性については、1935年に京都帝国大学の湯川秀樹が中間子（原子核の中で陽子と中性子を結合させる媒介）の存在を理論的に予言した時点ですでに明らかになっていた。そして、米国の科学者アインシュタインは、1939年にアメリカのルーズベルト大統領宛てに提出した、原子爆弾の開発を求める書簡に署名している。つまり、平和主義者として有名だったドイツ出身のアインシュタインをはじめとする多くのアメリカの科学者たちは、ナチス・ドイツが核エネルギーを使った新しいタイプの極めて強力な爆弾を作ることを強く懸念しており、その懸念が「マンハッタン計画」に繋がったわけだ。U

ポートをはじめ、全世界を驚かせる兵器開発と戦力増強を急速に進めていたナチス・ドイツは、当然原子爆弾の研究・開発も進めていたから、アメリカの科学者たちの危機感は強かった。したがって、イギリス本土空爆とそれによるイギリスの屈服（降伏）を第一義的に追求していたヒットラーの関心が、原子爆弾よりそちらに向かっていたのは、ある意味でラッキーだったかもしれない。

日本における原子爆弾研究の出発点は、1941年5月に、陸軍航空技術研究所から理化学研究所へ「ウラン爆弾製造の可能性について」の研究依頼をしたことにはじまる。ところが、東京が空襲されたため、理研での研究は中止され、新たに海軍の要請により、京都帝国大学の荒勝研究室での原子爆弾開発の研究が始まった。しかし、その研究室の研究の実態は？そのスピードは？その成果は？

■□■強すぎるテーマ！TVドラマでOK？いや絶対映画に！■□■

『キネマ旬報』8月下旬号は『映画 太陽の子』を67頁から77頁にわたって特集している。そして、その冒頭には次のとおり書かれている。

『太陽の子』というテレビドラマが2020年8月15日、NHKで放送されたが、今年公開される映画はそれの劇場版ではない。映画を作ったうえで、テレビドラマに編集されたものが昨年のテレビ版であった。

そのからくりも解き明かすほどに、

「太陽の子」はやはり本来映画であるべきだった一。

また、本作の脚本を書き、監督した黒崎博の「インタビュー」では、「デリケートな問題、映画にしなくてどうするんだ」というタイトルで、①「強すぎるテーマ、2011年を経て」、②「映画人の狂気で科学者の狂気を描く」、③「120分の映画から80分のドラマに」、④「柳楽、有村、三浦のエネルギーを伝えたい」の4つに分けて、熱い思いを語っている。

私は、近時日本で大流行している人気TVドラマの劇場版映画は好きではない。その代表が『相棒』だし、近々公開される『マスカレード・ナイト』等もそうだ。しかし、『キネマ旬報』7月下旬号が、「日本映画、三様」として挙げている、近々公開されるTVドラマの劇場版映画である、①『科捜研の女—劇場版—』、②『マスカレード・ナイト』、③『映画 太陽の子』は、別モノ！？昨年8月15日にTV放映された『太陽の子』を見逃していた私にとっては、そんな「強すぎるテーマ」を、そんな熱い思いで映画化した本作は必見だが・・・。

■□■コロナ禍での五輪の可否は？8月6日の本作公開は？■□■

私はコロナのパンデミック化が始まった2020年の春頃から、「東京2020の開催は無理」と予言していた。その予言どおり（？）、東京五輪は一年延期されたが、2021年7月23日に強行（？）開催された。その開催中にコロナの第5波が襲来し、爆発的感染拡大が広がる中、8月6日の広島原爆の日を迎え、更に8月8日には閉会式を迎えた。メ

ダル獲得数が史上最高となったこともあり、日本国は一方ではそれなりの高揚感に包まれたが、他方では「五輪ナンセンス」との声も強い。

そんな中、私が異様に感じたのは、例年広島で開催されている8月6日の「原爆記念日」の報道の少なさだ。五輪開催に明確に反対した朝日新聞は、8月6日、吉永小百合の「詩で伝える原爆と福島」と題する長文のインタビュー記事を掲載したが、その他の新聞やテレビでは広島「原爆記念日」の報道は極端に少なかった。これを見ても、ワクチン敗戦に至った日本人のバカさ加減と同じように、メダル獲得に熱狂する日本人のバカさ加減は明らかだ。東京2020でのメダル獲得一色になっている日本のマスコミは、自己批判を含む反省が必要なのでは？

そんな状況下の2021年8月6日に公開された本作に私は大きく期待したが・・・。

■□■柳楽優弥に拍手！だが、この脚本では？この展開では？■□■

本作導入部では、1944年9月当時における京都帝大の荒勝文策研究室の姿が描かれる。難しい物理学の理論をセリフや数式で説明していく若き科学者・石村修の役は難しいはずだが、『HOKUSAI』（20年）で若き日の葛飾北斎役を見事に演じた柳楽優弥は、それを事もなげに熱演している。本作導入部ではさらに、修の幼なじみの朝倉世津（有村架純）や、今は軍人として戦地にいる弟の裕之（三浦春馬）との関係（三角関係？）が手際よく描かれる。それを見ていると、当時の時代状況や主人公たちの人間関係がすべてよくわかるが、そんなにすべてよくわかることは、映画ではいいことなの？

そんな疑問を持ちながら見ていると、時代は1945年の初夏に移っていく。初夏というからには梅雨は開けているはずだから、6月末ないし7月初めのはず。しかし、1945年8月6日には広島に原子爆弾が落とされ、8月15日には終戦を迎えているのだから、以降のストーリー展開は忙しくなるはずだ。そう思っていたが、本作ではそこからおもむろに（？）、弟の裕之が突然自宅に戻ってきたり、修が遠心分離器を巡って急に良いアイデアを思いついたり、ストーリーが展開していくのでそれに注目！

しかし、戦局厳しき中、なぜ裕之が自宅に戻ってきたの？それは、部隊が配置換えになった機会に、肺を治すようにと軍医から休暇を与えられたためだが、ホントにそんなのあり？また、修が思いついたアイデアはそれなりのものだが、それを実験する時間は一体どれくらいあるの？近時の邦画の“分かりやすさ”はそれ自体が悪いわけではないが、私にはストーリーをつまらなくしているとしか思えない。それは、黒崎博監督作品である、現在放送中のNHK大河ドラマ『青天を衝け』も同じだ。そのため、実は近時の私は、2019年の『いだてん～東京オリムピック噺～』に続いて今年のNHK大河ドラマに興味を失いつつあるのだが・・・。

■□■若き科学者たちの葛藤は？荒勝文策教授の信念は？■□■

兄の修は科学者、弟の裕之は軍人だが、それは軍人だった父親との関係でも、2人を分けて育てている母親フミ（田中裕子）との関係でも了解済みのこと。また、この2

人の男性の間にある（？）世津との関係においても、それは了解済みであることはストーリー展開を見ているとよくわかる。しかし、本作が描くこの3人の“三角関係”（？）については、後に不可思議な展開になっていくので、それに注目！

他方、当時の大学院生を含む日本男児が、兵役に就く意義をどう考えていたのかについては、荒勝研究室に集う若き科学者たちの中で葛藤があったのは当然。そして、本作ではそこはかなり力点を置いて描いているので、それに注目！荒勝研究室には、木戸貴一助教授（三浦誠己）、岡野真三助教授（宇野祥平）、清田薫助手（尾上寛之）の3人が荒勝教授を支えていたが、その下で原子爆弾開発の研究に意欲を燃やす若き科学者（大学院生たち）は、修の他、修の1期上の花岡喜一（渡辺大和）、堀田茂太郎（葉山奨之）、村井正史（奥野瑛太）たちがいた。彼らの熱き議論は、対立すると内ゲバ状態になってしまうが、それを押しとどめつつ、あるべき方向性をまとめていくのがリーダーの荒勝文策教授だ。黒崎博脚本によると、その論旨は彼のセリフのとおり、「もし、我々が核分裂をコントロールし、そのエネルギーを自由に使えるようになれば、戦争はなくなる。世界を変えるために科学をやるのだ。科学者なら大きな夢を語れ」というものだが、あなたはホントにそれで納得できる？

パンフレットにある浜野高宏（プロデューサー）の「第二次世界大戦下における日本の『核兵器の研究』とは？」と題された「HISTORY」を読むと、そこには「原爆に『名を借りて』原子物理学を継続し、若手研究者を戦後に温存しようという配慮から引き受けたのだろう」という記載がある。現にスクリーン上でも、戦局厳しき中、結果を見出せない研究に疑問を抱き、「俺は軍隊に行く」と宣言して出征した堀田を、荒勝教授が病気だと偽って研究室に戻すストーリーが描かれるが、これがホントなら、そりゃナンセンスでは？

■□■疑問①裕之はなぜ自殺未遂を？人物像の掘り下げは？■□■

本作導入部は1944年9月から、本筋は1945年の初夏から始まる。しかし、本作では全編を通して京都の町や荒勝研究室の平穏さが目立ち、敗戦直前の空襲警報に苦しむ国民の姿はほとんど描かれない。東京大空襲が1945年3月10日、大阪大空襲も1945年3月13日だから、いくら古都京都に空襲が少なかったとはいえ、この危機感のなさは一体何？

さらに本作では、母親の配慮で若い者同士3人が丹後の海で戯れるシークエンスが描かれる。私に言わせれば、病気のために一時的に帰宅している軍人の裕之が海水浴に行くという設定そのものがナンセンスだが、そこで三角関係（？）だった3人が、三者三様の思いを打ち明ける青春事情もナンセンス。さらに、帰りのバスがエンストし、3人が他の乗客たちと一緒に野宿する中、裕之がいなくなり、1人海の中に入って自殺を図るというストーリーはこりゃ一体何？柳楽優弥、有村架純、三浦春馬という俳優は今の時代状況下でベストだが、黒崎博監督の人物像の掘り下げはどうなっているの？

以下、本作の疑問点を挙げていくが、これが私の疑問①だ。

■□■疑問②広島調査は？玉音放送は？■□■

本作のテーマは“日本における原爆製造”だが、戦局が悪化していく中での荒勝研究室の研究レベルは、到底そんなレベルではないことはすぐにわかる。修が思いついたグッドアイデアは遠心分離機的能力を高めるもので、それなりの成果を上げたようだが、沖縄が落ち、本土決戦が叫ばれている戦局下、そんなレベルの研究に一体何の意味があるの？

そんな疑問で悶々としていると、いきなり荒勝教授が広島に新型爆弾が投下されたニュースを聞いているシーンになるからビックリ。それ以上に驚いたのは、その直後スクリーン上は修を含む荒勝研究室の面々が列車に乗って広島調査に赴いていることだ。列車の扉を開けると、彼らの目の前には一面焼け野原になった広島の風景が……。これはたしかに映像としてはインパクトが強いが、被爆直後の広島があんなに人っ子1人いない状態で修たちを待ち受けていたの？また、あんなに簡単に被災直後の広島での現地調査ができたの？

本作では、修が「核が分裂していく姿は危険だけれども美しい」と世津に語るシークエンスに象徴されるように、“美しさ”が目立っている。それと同じように、修たちが見た被爆直後の広島は、焼け野原ながら何とも美しい風景として描かれている。しかし、これはあまりにナンセンス！ちなみに、パンフレットにある「原子爆弾開発と第二次世界大戦をめぐるおもな動き」によれば、長崎に2発目の原爆が投下された翌日の8月10日に、「荒勝研究室などによる広島調査始まる」と書かれている。これは、きつと史実なのだろうが、その実態は本作に描かれたようなものでなかったことは絶対間違いない。しかるに、本作のような描き方は一体何？こりゃバカげているとしか言いようがない。

さらにナンセンスなのは、8月15日に天皇陛下の玉音放送が本作には全く描かれていないこと。これは、本作ラストのクライマックスを比叡山のシーンに設定したためだが、荒勝研究室は2回目の広島調査をいつに設定していたの？そして、それに同行したいと申し出た修の、何とも奇抜な提案はいつ思いつき、いつ実行したの？余りにも史実を無視したこんな脚本はナンセンスという他ない。

■□■疑問③いざ比叡山へ！そんなバカな！■□■

今年のNHK大河ドラマ『青天を衝け』では、冒頭の北大路欣也扮する徳川家康の登場にビックリさせられたが、それなりの歴史ストーリーを興味深く鑑賞してきた。しかし、ストーリーが進むにつれて、次第にエンタメ色とバラエティ色が強まってくると……。

パンフレットにある黒崎博監督の「INTERVIEW」の中で、「ラストの山のシーンも印象的です。」という質問に対して、黒崎博監督は「荒勝教授が原子爆弾を見るために比叡山に登ろうと言ったという証言が残っていました。本当かどうか分からないのですが、僕はその一言がこの物語のキーになることは間違いないと思い、どんなフィクションになっても使いたいと考え、映画では主人公に言わせています」と語っている。これを読んで私は、本作のクライマックスの設定は黒崎博監督の“確信犯”だとわかったが、8月6日に広島

に原爆が落ち、8月9日に長崎に原爆が落ち、8月15日に玉音放送が流れたのは、動かせない事実。たったそれだけの期間の中、修が「3発目の原発が京都に落とされるかもしれない」と考えたことくらいはオーケーだとしても、科学者としてそれを実際に見聞するために比叡山に登ると発想し、それを実行する物語をスクリーンに描くのは、いくらフィクションだとしてもそりゃ無理だ。

黒崎博監督は、前記発言に続いて「真実を突き止めるために、誰かを傷つけてもかまわないとどこかで思う主人公というのは、ある種狂っていますし、その狂気は非常に罪深い。でもひょっとするとそういう狂気がないと科学って前に進んでいかないのかも知れないという気もするし、分からない。何がどこまで許されるのか、ただそれはぜひ、観て下さった人にたくさん考えてもらえたらいいなと思いました。ハードなテーマを含んでいることは間違いないけど、届けばいいなと思います。」と語っているが、これも私に言わせれば大きくピントがずれていると言わざるを得ない。若き科学者としての修が、ある種狂っていても別にそれは問題ではないし、私はそれが罪深いとは思わない。私が疑問に思うのは、「荒勝教授が原子爆弾を見るために比叡山に登ろうと言ったという証言が残っていた」ことに注目して、本作のクライマックスのような脚本を書き、その演出を堂々とやっていることだ。

ちなみに、『キネマ旬報』8月下旬号では、本作について星4つをつけた須永貴子氏を除いて、山田耕大氏、吉田広明氏は、共に星2つの低評価の上、かなり厳しい評論をしているので、是非それも読んでもらいたい。

2021（令和3）年8月13日記